

たごうら児童クラブだより

～冬の増刊号～



平成 20 年 12 月

<はじめに>



21年度にむけて、
私たちたごうら児童クラブは、一つのテーマを掲げています。

自立へ向かって

子どもに限らず、私たち大人も同じテーマです。

自立とは…

一人で生きていく力ではなく

社会の中で、一人一人が生き生きと個性を發揮しつつ、
お互いに支え、助け合いながら、共に生きていく力です。

自立するため、大切な3つの「育ち」があります。

(1) 「自分を大切にする心（自尊感情）」が育つと…
→私たちは、不安の中でも安心をとりもどせるようになります。

(2) 「自分から進んで行動出来る力」が育つと…
→私たちは自信がないところから自信を持てるようになります。

(3) 「自分から良いものを選択出来る力」が育つと…
→私たちはたくさんの物や情報に惑わされずに、自分のために
よい物を選びとるようになっていきます。

それによって

大人も子どもも、よく考え、自分の夢や希望を見いだし、
目的に向かって前に進んでいけるエネルギーを与えられます。

大きな目標ですが、これから時間をかけて、ゆっくりじっくり少しづつ
皆さんとごいっしょに、考えていけたらと願っています。



1 話し合う親子

～気持ちを聴いて話し合う関係へ～

「親の言うことを聞かないで困っています。どうしたら、素直な子になるでしょうか？」



「話してよかつたなあ」と親子で感じあえたたらステキ！

クラブに子どもを預けてしばらくすると、必ずある相談の一番がこれです。

親だったら、言うことを聞く素直な子になってほしいと願うのは当然です。素直な子なら、なんと育てやすいことでしょう。でも、クラブで一番相談件数が多いということは、やはりほとんどの子が、残念ですが「言うことを聞かない子」なのですね。

では、反対に子どもの願いも聞いてみましょう。多くの子どもはよくこう言うのです。

「なんでもいろいろ口うるさいんだよ。ボクの願いをわかってくれる優しい親になってほしい。」

あらあら、これは大きなすれ違いです。初めは、ちょっとしたズレかもしれません。でもずうっとこのままにしてしまうと、やがてひずみはどんどん大きくなり、楽しいはずの我が家は暗くなる…そのうち関係ない兄弟や祖父母までも巻き込んでしまい、家族みんなが不愉快な悲しい気持ちになってしまいます。

どうぞ、すれ違いに気がついたら、早い段階でおすすめします。親子でお互いに気持ちをじっくり話し合ってみたらいかがでしょうか。

お互い持っている、違う「願い」をもっとわかりやすいことばにして、気持ちを伝え合いながら、また少しずつゆずれるところはゆずり合えるように、話し合いという形で、前向きな解決をしてみたらどうでしょう。

たしかに子どもの「わがまま」は限りない、と言ったらそれまでのことです。子どもの思いは「どうせ聞いてもらえないから」という大人へのあきらめが強いので、なかなか見えません。実は、本当に求めているのは物などではなく、自分の気持ちをまず親にわかってもらいたい、満たされたい思いが一番なのです。が、当の子ども自身もそのことには気づいていません。

だからこそ、気持ちを満たしてあげながらも、本当のわがままとは何かを教えてあげないと子どもにはなにがなんだかわからないのです。「自分の意見」「わがまま」も、ごっちゃになっていて、これから子ども自身、生きていくのにとても困るのであります。

もしかしたら、大人だって「わがまま」で言っているのかも知れませんし。それは、よくないですよね。子どもは、けっこう見抜いています。

だからこそ話し合い、そして譲り合いも大切なのです。

「話し合い」という場は、小学校に入学する頃から、子ども達はいつも集団生活の中で経験しています。むしろ大人社会の方が、複雑なしがらみがあり、気持ちのよい「話し合い」が出来なくなっているのではないかでしょうか。

我が家で、国会中継のヤジを見ながら、娘達が声をそろえてよく言うのですが、

「どうして偉い大人が静かに話し合いをしないの？ウチらは、もっと静かに人の話を聞くよ。先生だってそういうくせに変だよ！大人のクセして、そういうの恥ずかしくないわけ？」

まさに、そのとおりだと思います。

どの子どもたちも、いつも「納得したい」という願いを持っています。これは、「理解したい」

「明らかにしたい」という学習意欲そのもので、彼らの持つすばらしい才能、そして大切な成長願望なのです。この宝を、つぶしてしまうのは、実にもったいないです。

親の言うことにもいろいろあります。

「早くしたくをしなさい」

「どうしてすぐに行動できないの！」

子どもの言ふこともいろいろです。

「今やろうと思っているのに急がせるからやる気なくすんだよね」

「なぜ子どもが自分で自分のやることを決められないの？なんでも親の言う通りにすぐしなくちゃいけないの？私のことなんだからちょっと待っててよ。」



今まで、素直だった子が、急に言うことを聞かなくなった、返事をしない、話さない、無視する、動かなくなった…こんな時は、たいてい子どもがこう考えていると思ってみて下さい。

「親の言うことだからって、本当にいつでも正しいのだろうか？ボクはボクなのに。」

「私は親のロボットじゃない。やりたければ、親が勝手にやればいいじゃん。」

そうです、ついに目覚めてしまったのです。この反抗が、「自立」にむけての成長なのです。ちなみに、「反抗期」と言うのは、親側からすると育てにくいで「反抗」と表現しているだけで、これこそ、子どもの自立の「芽」が出た状態のことなのです。だれにもあること、成長出来る最も大切な場面なのです。

ところで、やっと芽がでた時、私たちは、むりやり引っ張ったり踏んだりはしません。毎日お水をやりお日さまの光を当ててあげながら、結局、芽自身が、自分の力で伸びていくのを、育てる人は、ただ「見守ることしか出来ないです。

見守るとき、どの親も一番苦しいのは、
「自分は子どものために何もやっていない
のでは？」

という子育て不安が毎日のように襲ってくる
ことです。また、周りの目もあります。
「ちゃんと教育してるのか？」
「反抗なんかさせて。しっかりしつけない
とダメよ！」

世間はすぐそういう、私たち親を不安に
さらすのです。不安がどんどん積もっていくと、ついつい子どもへの口数が多くなって、ますますお互いの心が離れてしまう…

でも親だって、わかってはいるのです。
だからこそ、不安になったら、誰かが
「これでいいんだよ、大丈夫よ」
「今は見えないけど確実に芽は伸びている
よ。」

こういって、励ましてくれさえすれば、
いつでも、希望が持てて毎日元気になれる
のです。

私たち児童クラブの指導員は、保護者の
皆さんに、そういうお手伝いをしたいと心
から願って毎日励んでいます。



話し合いをする家族には、こんないい
ことが起きます。

子どもは、どんな意見でも自分の考え
たことが認められるとわかってくると、
だんだん、わがままではない「良い意見」
を言いたくなります。ほめてもらえる
し、認めてもらえるからです。願っていた
わが子の成長が、目に見えるものにな
ってきます。

ちょっと方法を変えただけで、手応え
が感じられ、親だって子育てが楽しくな
ります。

はじめに書かれた「3つの育ち」の1
つ、「自分を大切にする心」＝自尊感情
が、子どもに芽生えています。

ぜひ、子どもがいろいろな意見を自由
に話すことができて安心出来るご家庭
を、作ってあげて下さい。



これからも、元気の出る子育て、そ
して親育ちを、ご一緒に楽しく経験して
いきましょう。

2 見守る親とは・・・

子どもを見守るとはどういうことでしょう？
放任や過保護とは、いったいどこが違うのでしょうか。

次に、よく出る質問もこれです。

放任も過保護も、実は同じ一線上にあります。どちらも、子どもの側ではなく、親の側からおきる身勝手な育て方だからです。結局は、子どもが自立するのを支援する立場ではなく、親の願望こそ第一の目的、という点ではどちらも同じことなのです。

例えば、クラブで子どもたちが、逆上がりをしたり一輪車などをやるとき、よくこんなことばを投げかけてきます。

「やるから、来てよ、見にきてよ」「ねえ、見てて、見てて、やるからね。」だれも、「やって、やって」なんて指導員を呼びにはきません。

「じぶんでやる！見ていて欲しい、けどやるのは自分だ、人にはやってほしくない。ボクが出来るところを誰かに見ていてほしい、そして出来たら、ほめて欲しいんだ。」

そういう意味ですよね。

また、もしもあぶない時はすぐ助けてほしい、守ってほしい、そういう気持ちもあると思います。



過

保

護

？

そ

れ

と

も

放

任

？

そこで親が、

「どうせあなたには出来ないから、私がやってあげる！」

と言う、これが過保護です。親自身が「実は、あなたの失敗が不安なの、ま

ず誰より先に私こそ安心したいの。」

と願望しているにすぎないので。厳しいですが、親自ら、我が子の成長よりも、自分自身を満足させたいだけだったんだ、ということにしっかり気づき、改善していく必要があります。

反対に、

「子どもの逆上がりなんて、見る時間がもったいない。私にだってやりたいことがあるのに、どうして付き合わなくちゃいけないの。」

我が子の笑顔や成長が自分の喜びに感じられない。それよりも先に、この私はどうなるの。そんな余裕はないし、めんどう…

これが放任です。



どちらも、親の願望が第一という共通点があります。どちらも、親自身の問題です。自分はまだ満たされたい、まだまだ足りないと感じている、与えるより与えられたい。この状態だと、子育ては喜びでなく苦痛そのものです。子育てこそ、与えるばかりで何の得もない、誰もが感じさせられるような一面をもつものなのですから。

与える喜びというのは、損得の考え方とは全く次元の異なるもの。経験して初めて分かる価値あるものです。

これは「子どもが問題…」なのでなく「大人の問題」です。

もし子育てをしていて、満たされない気持ちに襲われ、そのことで悩むようになったときは、けっして一人で解決しようとはせず、ぜひ、SOS を出して、必ず誰かに相談してくださいね。1人で解決するのはなかなか大変です。クラブ指導員も心より支援していきたいと願っています。

「子育ては自分育て」というのは、まさにこういうことで、親自身も、子育てる中で、いやがおうでも、自分自身の姿と向き合わないわけにはいかない…。親も親になるために人間として成長させられていくのです。成長には、苦痛が伴います。でも、乗り越えたとき、それはすばらしい宝物となるのです。



では、過保護でも放任でもなく、親として「見守る」にはどうしたらいいのでしょうか。

ここで親の目的をもういちど整理しましょう。

私たち親が与えられている子育ての最終目的は、成人するまでに子どもを「自立」させることではないでしょうか。いつかは、自分で、自分の面倒をみられる子にしなければなりません。また、困った時は助けを求め、得意なことでは周りの人にも手を差し伸べることができるぐらいにまで、成長してもらいたいと願います。ですから、自立の発芽は、喜ばしきことです。

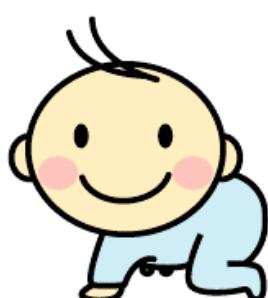
でも、せっかく芽が出たのに、一番育てて嬉しいはずの親が、普通に喜んで受け入れられないのはなぜでしょう。残念なことに、人間が植物と大きくちがうところは、育てている親にとって、我が子の自立の芽は、「反抗」というかたちでニヨキニヨキ出現し、しかもとげを出しこちらに向かって攻撃てくるからなのです。育てている側が、愛らしい発芽を喜ぶのとは違い、反対にとってもイヤな気持ちにさせられてしまう…。

だからこそ、親も、少し距離を置いて物事の見方を少々えていかないと、まともに対応したら怒りの感情がフツフツと沸き上がるばかり、毎日がとてもきつくなってしまうわけです。

では、我が子の自立の発芽を大切にしたいと願う私たち親には、この反抗に対していったい何が出来るのでしょうか。ただ親の方が、子どもとの距離を置いていくだけで、かかわらない今までいいのでしょうか。いつまでも「転ばぬ先の杖」の発想ではいけないと思いつつも、ただそれだけというわけには…。実際の親の仕事とは、なんなのでしょう。

ここで、もう一度放任との違いを確認しましょう。「放任」は、親のペースが第一、子どもがそれに合わせることでした。これに対し「見守る」とは、子どものペースに親が合わせていくことです。正反対の作業です。

今までやってきたこちら側の助ける度合いを、少しづつ、減らしていくのです。そのさじ加減は、実際に、自分の子どもに親自身がやってみないことには、わかりません。親も、小さな失敗をしながら、修正しながら進めていくのです。



ちょうど、歩き始めた赤ちゃんに、少しづつ、こっちこっちと後ずさりしていく光景と似ています。いきなり大きな転び方をしないように、親が距離を加減します。でも少し転ぶくらいの距離は欲しいと思います。赤ちゃんはよたよたしながらまた前に…、親の温かなまなざしを感じながら進みます。親の顔を見つめて安心感に満たされた赤ちゃんは、転んでもすぐに立ち上がり、少しづつ自信をつけながら、どんどん進んでいきます。お父さんやお母さんの笑顔に再び安心して、またまた自信をつけていきます。

受け入れる側は、ちょっと意地悪しているようでドキドキ、ちょっとぴり可愛そうに思えます。が、実に喜ぶべき素敵な親の作業です。

懸命に頑張っている赤ちゃんに、叱りつけるような厳しい言葉かけは禁物。むしろ、ほんの少しでも出来るようになったことに、こちら側が気づいてあげて、一緒に喜び笑顔でほめていくのがなによりも大切だというのは、皆さんもよくご経験されたことでしょう。

たとえ、反抗期であっても、これと同じで、新しい技術なんてものは、そんなにないので。こちら側の向き合い方、受け止める思いさえ、ゆるがず信じてどっしり構えていれば、まったく問題ないのです。

どうぞ、これからもクラブの皆さんとご一緒に、安心しながら、嬉しいことも悲しいことも、共に分かち合っていきましょう。

3 考える子 選べる子

「うちの子は、考えないで、すぐ行動してしまいます。よく考えればわかることなのに、なんで、いつもこうなんでしょう」

これが、3つ目に多い親たちの嘆きです。低学年のうちは、誰にでも、頻繁によくおこることですよね。また、大人だって、事と次第では、未だによくあることなのではないでしょうか。

ところで、懐かしい話ですが（いえ、ついチョット前?…）中学の理科で、条件反射とか脊髄反射を習ったこと覚えておられるでしょうか。たしか「反射」を2つ学びました。頭の脳を経由する「条件反射」と、脳を経由しないで背中のあたりにある脊髄を経由する「脊髄反射」。

教科書に、ちょっと可愛そうなカエルの下半身だけひもで吊るされている写真が載っていて、みんなで「残酷～！この実験やるのかなあ？」なんていいながらけっこう楽しんでいたのを思い出します。

私は、あまり考えないですぐ行動してしまう子を、脊髄反射系だな…ってよくイメージします。（ごめんなさい、本当は違いますよ（＾＾ゞ）

みるからに、そういう子は運動神経がとってもいいのです。一瞬にして、手や足が出て、指導員のおばさんペースでは全く追いつきません。

「ちょっとストップ！」

なんて言って駆けつけたときは、もう2,3発やり合った後です。

そう、彼の長所であるこの素早さが災いすることもあるのです。暴力に対しては、脊髄反射では困るわけです。

「あなたの脳みそまでちゃんと通ってた？届かないうちに手足を動かしちゃってない？お願ひだから、自分のあがった手をみたら、そこでゆっくり考えて！何をすることがいいのかな？って。自分の脳みそに聞いて下さいよ～。」

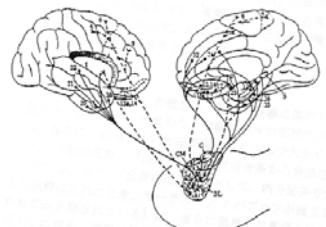
こんな声かけをします。ただ怒るのではなく、もっと、子どものペースに合わせたわかりやすいことばを使ってイメージしてもらい、「伝える工夫」をしています。

もし、我が子によく考えて行動する子になってほしいと願うなら、まず、十分な時間を与え、ゆっくり考える機会を保障することが必要です。素早くではなく、ゆっくり進めることです。先ほどの通り、親ではなく、子どもの理解出来るペースで…。

「ちょっと静かに考えてみてごらん。安心して考えられる場所、どこがいい？」

クラブでは、トラブルが起きると、まず、考えることをしていただきます。

よく台所を使います。一人になれて、誰にも邪魔されず口出しされない空間です。



次に、考える子になってほしいなら「選択肢を与える」ことです。いつも考えていない子に、いきなり、よく考えなさい！といつても、なんのことだかわかりません。先ほどの脊髄反射系はなおさらです。

でも、必ず、考えてもらえる方法があります。それが選択肢です。

クイズでも、三択問題なら、子どもたちは、まず何かを選びます。選ぶために、少しは考えます。

クラブの中で、子どもたちが走り回ってうるさいとき「静かにしなさい！」といつても、まず意味がありません。だって、うるさくしている子達には、周りがうるさいわけではなく、ただ夢中に遊んでいて楽しいだけ。自分しか見えません。

だからこう言います。

「はい、○○くんたち。周りの人はうるさくて困ってます。知ってた？気がついてないでしょう。ほらほら、みんな迷惑そうな顔してるのわかる？さて、どうするかな。外に出て追いかけて続く？それとも、部屋で、宿題やる？」

「あっ、やば、忘れてた、宿題宿題」

という子もいれば、

「騒ぎたいから、外にいきます！」

と、そのまま靴箱に突進する子もいます。少なくとも、この子達は、考えて選びました。良いことを選んだので、叱られる必要はありませんでした。指導員は叱るのではなく、ただちょっと気がつくように、まわりの空気を伝えてあげただけです。

もし、「どっちもやだ」といたら、「三つ目にルールが守れないからクラブをやめる、っていうのもあるよ」と静かに言うと、たいていは「はいはーい、わかったよ」とわけなくすんなり納得します。



選択肢を何にするか？これを考えるのが、親の出番です。限りなくいろいろアレンジできます。墓穴を掘るような選択肢を出してしまい失敗するのも、私たち指導員には良い経験です。

先日、夕方5時前、せっかく室内に子ども達を集めたあと、これをやってしまって、再び子ども達が勢いよく靴を履き出し、運動場に出て行ってしまい、大慌て。他の指導員にとても迷惑をかけてしまいました。外に出た子どもたちみんなにお願いして、帰って来てもらいました。子どもたちはとても寛容でした。むしろ、威張って帰ってきます。自分の気持ちを大人に大事にしてもらえたわけで、ある意味で、これもいい経験だと思いました。

まさに、一瞬にして、選択肢を考える、これこそ子どもとの知恵比べです。

ぜひ、選ぶものどれでも、すぐ対応出来るように工夫しながら、楽しい選択肢を作つてあげて下さい。

また、指導員が疲れてきて選択肢をいろいろ考えるのが面倒くさい時よくやる手として…指導員から反対に子どもたちに質問します。

「ねえ、部屋で静かにするのに、どんなことなら出来る？いい方法考えてくれない？大人は、もう考えつかないよ。」

今度は、子どもたちに考えてもらうことにします。すると、意外にも彼らはまじめに反応して、いろいろと知恵を出しますが、不思議不思議、あまり外れたことを言いません。

4 挑戦する子 失敗してもあきらめない子

望ましい行動を選ぶ子

「自分の目標をもち、それに向かってまじめに努力する子に育てたい。
うまくいかなくても、他人のせいにせず、自分で責任を持つ子に育てたい」と、親は願っているのに、子どもは、すぐに楽な道、ズるい考えに流されてしまします。

たとえ「考える子」でも「選択出来る子」でも、根気がなく、ずる賢さが身につき、曲がった方向にいってしまったら、親としては本当に悲しいですね。そうならないで、まっすぐお日様に向かってすぐすく伸びるように、方向付けをすることも、大切な親の役目です。これを「しつけ」ともいいます。仕付糸のようにおおまかなライン（道）をつくることです。

（1）望ましくないしつけについて～体罰～



まず、私たちがつい手軽に使ってしまう一番残念な方法は、体罰です。クラブでは、皆さんの大切なお子さんをお預かりしている以上、絶対に避けなければならないしつけの方法です。

保護者の皆さん、御家庭でこのしつけをされてしまうと、私たち指導員がとても難しい状況になるということを、ぜひご理解ください、ご一緒に考えて下さることを心よりお願いします。

「体罰」とは、こらしめのために身体的な苦痛を与えることで、日本の学校教育では、法律によって禁止されています。一般的には、言うことを聞かない子どもに対して、殴る・蹴るなどがあげられますが、しつけとしてはもっと広い概念を含みます。

子どもの心に苦痛を与え傷つけるような行為、また、いじめ・嫌がらせや暴言もそうです。



体罰の弊害はこんなにあります。

① 愛はしごきだと勘違いする。

→やさしく扱われる人や喜ぶ人を見るだけで赦せない感情が育つ。
自分に甘く人に厳しい子になりやすい。

② 体罰する時、親は冷静ではない。必ず怒りの感情を含んでいる。

→子どもには納得がいかず、言葉にできない不満や怒りを育てる。

③ 恐怖で人をコントロールするのに慣れる。

→支配する側とされる側の関係に慣れ、友人関係にも適用する。
人ととの、対等で良好な相互関係が作れないまま成長する。

④ すぐに効果があるので、簡単に使いがち。

→他のコミュニケーション方法を知らない。使わない。工夫しない。
言語や、筋道をたてた論理的手段は、即効性がなくめんどうに思う。
思考が単純化するので、情緒的な成長も乏しくなる。暴力的。

⑤ 慣れて効かなくなると、もっと強い体罰になっていく。(エスカレート)

→高学年になると親が体力的に負ることになり効果がなくなる。
支配する側とされる側が逆転し、家庭内暴力になる可能性大。
または、怒りを自分に向ける自傷行為が始まるか…。

⑥ 見ている周りの人間も怖い思い、悲しい思いになる。(周りが不幸)

⑦ けがをする。

→取り返しのつかない結果にもなりうる。

⑧ 子どもも暴力を学び、この方法を使って生きていくことになる。

→怒りのコントロールを学べず、人との関係が作れない大人に。

(2) 望ましいしつけとは…

それではここから、望ましいしつけとしてどんな方法があるのか、一緒に考えてみましょう。これまで、クラブ指導員が何年か実践してきたなかで、とてもよかったですと思えるものばかりを、いくつかご紹介しましょう。

① 「叱る」から「ほめる」へ

- ・ 良くない行動をしたときは、叱らずに、その場を離れ関わりを持たない。
とても残念だ、という気持ちを、さらっと伝える程度で、ほかに何の反応も示さないほうがよい。
悪い行為をしてかまってもらいたいというような態度には、むしろ、関わらないでとことん無視するほうが、効果的。
かわりに、当たり前のことでも、良い行動をした場合は、大いに喜びを表し関わりを持つと、しだいに良い行動をする方向に導いていける。
- ・ 失敗したときは、これまでのプロセスを大いに評価して、ほめ励ます。
失敗から学ぶ、今早く経験してよかったです、などと希望を示していく。
- ・ 毎日出来ている事も振り返ってほめる。
子どもはいつでも褒められたいもの。
「○○ちゃんは、いつも出来ているから本当に助かるよ～」
- ・ うれしい、誇りに思う、最高だよなど、素直な気持ちを伝える。
自分メッセージ（自分の気持ち）を言葉で伝える。
- ・ 段階的にとらえ、前より出来ている事をほめる。（×完璧主義）
「いつのまにか～自分で出来るようになったね。すごい！」



② 子どもの心と身体を大切に思う声かけをする（人格を尊重する）

悪い「行動」については、はっきりとしたことばで叱るが、そのとき子どもがやりたかった理由「気持ち」は受け入れる…（共感する）

- × 「同感」はダメ！→「親のボクも同じことするし、実際
だれでもやることさ。気にするな」（同感）
- 「共感」が大切！→「親の私でも同じこと思ったりするよ。でも
たとえ思っても、やってはいけないことだ。
大人になっても、良い心と悪い心があって、
誰も、心の中で、戦っているんだよ。」

③ 人と比べない ～ほめるときも叱るときも～

兄弟姉妹、親戚の子、友達
親自身 「オレが子どもの頃は…」など



④ 叱るべきときに…

★ 愛する気持ちまで否定しないこと 存在を否定しないこと

- 行動を叱るだけで人格まで傷つけないで…
- そういうやり方は絶対に許さないぞ！やり方が嫌いだ。
 - × お前なんか、もう絶対にゆるさないぞ！
 - ×× お前が嫌いだ。生まれて来なければ良かった。

★ 冷静に話す

- × 怒る=怒りをぶつける
- 叱る=行動を修正するために、教育的、効果的な方法
冷静さや、的確な言葉を選ぶため時間も必要
怒りがあるときは自分を制する…その場を離れる
「今、とても怒っていて話が出来ないからあとにする！」
今は怒りでいっぱい、悔しいのだという「気持ち」を伝える。

★ なぜそうなったか、気持ちから聞く

- 威圧感を与えないように、すわるなどして、目線の高さを
子どもと同じ位置にして。

★ 前もってルールを決めておく

- ・ 必ず子どもが出来る範囲のものにする（年齢や発達を考慮する）
- ・ 守れたらほめることを想定しておく（ほめる目的で作るルール）
- ・ 前もってルールを破ったときにどうするか、約束をきめておく
ペナルティを作る（少し苦しいが出来るもの、終了のあるもの）
- ・ これらは必ず子どもが同意し納得し一緒に決めたものでなくては効果がない。
- ・ ルールを破っても子どもがペナルティを実行しない場合、制限のある拘束を行う。

「約束は守る」の徹底=ここは親として引き下がらないこと
ペナルティは必ずやらせる！一緒に決めたのだから！

（拘束の例） やるまで部屋から出ない ゲームができないなど

※（注意）食事、睡眠、身体的拘束は、基本的人権侵害となります。

★ 自分メッセージ（自分の気持ち）を言葉で伝える

- × お前が～したから…。 お前はいつだって～するじゃないか。
- お父さんは、お前が～して悲しいよ。情けないよ。
- がっかりだよ。きっと出来ると思ったのに残念だ。

★ そのときだけのことを叱る

- × 前からずっとこうだった。あの時もこうだったな！等
- 今回は、残念だったな。このルールはむずかしかったか？

★ 選択肢を与え選ばせて、行動修正をねらう

この場合、意地っ張りな子どもに対しては、冷静に伝えたあと、一度その場を離れるほうが効果的。（子どもにもプライドがある）

例) おもちゃを片付けさせ、夕飯にしたい時

「今片付けてご飯をたべるか、片付けないまま食べないか、自分で決めなさい。」

もし片付けをすぐしたら「いい事を選んだぞ！」と頭をなでてほめる。

もし、食べない方を選んだら、「わかった。約束だよ」といって、実行する。このとき、考える時間をカウントすると

「10のうちに考えるよ。はい1、2、3、4…」

ご飯を食べたいので、途中で気持ちを変えてくる事が多い。

どちらも選ばないのは、なし。その事で困る人は誰かを伝える。

「お母さんを困らせているよ。お父さんも迷惑だ、それはなし」

「選びなさい！」

などと、はっきり、毅然とした態度で伝える。



⑤ その他

- ★ 叱るときは「声を低くしゆっくりと」
タイムアウト（年齢=分 考える時間）
を与え、一人部屋で考えさせる。
- ★ なにごとも冷静に感情をむき出しにせず「これはうちのルールだったな」と事務的に伝えるくらいでいい。
- ★ 反対にほめるときは、事務的にせずゆったりとスキンシップをしたり、ごほうびをあげたり、オーバーにする。
- ★ 子どもの行動を修正する工夫として、兄弟や友達がそこで出来ているとき、そばにいた本人がほめられたいと願うように仕向ける。
「～ちゃんは、出来るんだね。
すごいなあ。」
注) 絶対に比べない事
- ★ 「どうせボクなんか出来ないんだ」といじけたら、「そんなことないぞ、やれば出来る力を持っていると思うよ」と、励ましてみるのも一つの手。



痛さを教えるために体罰をする という考えは？

その前に、本当にあなた自身が怒りの感情に任せていなかご確認ください。怒りの感情があるときは、むしろ離れたほうが、賢いと思います。

子どもは、「怒り」は学ぶが「痛み」は学ばず！ とても危険な方法です。

「愛のムチ」といいますが、痛みの向こうに「愛情」がある場合だけが効果的なのであり、また、子どもにとっては、その時点で、愛情を感じることは難しく、いつか大人になって初めてわかる、非常に遠まわしな表現です。

子どもは、そのときに、怒りこそ学んでみても、実際には、何の事なのかよくわからないままなのです。

かなりの信頼関係がある大人社会でも愛のムチの理解はむずかしいのです。ムチを打つ方も苦しくつらいのだ、というまわりくどい表現は、心と行動が一致しないとなかなか伝わらない低学年児童にとっては、レベルが高く、理解させることは不可能です。

もし、痛みを教えるなら、遊びながらであるとか、あるいは気分のいい時に子ども自身の手で、自分の体に自分でやらせるだけで、痛みの学習は十分出来ます。

「言葉」という手段があるので、危険な方法は避けるべきです。

<おわりに>

これまで、「自立」をテーマにさまざまなことをお話ししてきました。

大切な「3つの育ち」について

自分を大切にする心（自尊感情）	…安心する
自分から進んで行動出来る力	…自信をもつ
自分から良いものを選択出来る力	…自由に選べる

→→ 自分の夢や希望、目的を持つ子に成長していく

そして、私たちが出来るかかわりについて

- 1 話し合う親子（気持ちを聴いて話し合う関係へ）
- 2 見守る親
- 3 考える子 選べる子
- 4 挑戦する子 失敗してもあきらめない子
望ましい行動を選ぶ子



クラブで、子ども達と共に生活しながら、私たち指導員は、大人社会にはなくなりつつある大切な「子どもの思い」に気がつきはじめました。彼らこそ、実は、私たち大人が忘れかけているもの=「真実や本当の正しさ」を求めてています。さすが、未来を担う子どもたちです。

「『みんな頑張っているからね』だって？うそ、ちがうよ。頑張っていない人もいるのにさ、みんな許しちゃうの？それはないよね。しっかり見てほしいよ。悪い人はやっぱり、ちゃんと叱られてほしい。悪いことは悪いと、ちゃんと大人が言ってほしい。」

確かに、私たちは、悪いことをいつまでも許さないのではなく、互いに許し認め合う社会でありたいと願っています。

でも、そうなるまえに、このごろの私たち大人は、簡単に許すことにあまりにも慣れてしまってはいないでしょうか。

子どもたちが、とても大切なことでも、心ない態度で、口先だけ

「ごめんなさ~い。あやまつたからこれでいいでしょ」

「いいよ。いいよ。もうゆるしたからさ、怒ってないよ」

と軽く言い合い、表面的でその場しのぎの解決をしてしまうたびに、指導員は首をかしげます。

「本当にそれでいいの？あなた、簡単に許しちゃうの？」

と疑問に思うことがあまりに多いのです。

これも、私たち大人社会が教えてしまった、表向きだけの行動。いつも大人がやることです。

それでいて、本当に言いたいこと、伝えたい本音は全く言えずに、陰口だけは、どこかでいっぱいいっぱい発散している…。

メールやブログだったり、ネット掲示板に匿名でアップしてみたり。

それを見て、子どもたちは、同じように、まねしてみるのです。

これから私たちには、やはり、ことあるごとに、いったい何が悪かったのか？どうすればこうならなかつたかを、きちんと明らかにし、それを互いに本音で話せるような人間関係を大切に築いていかなければならないと思います。でないと、その後の「許し」とやらも表向きだけで、実は解決などされてはおらず、まったく意味がないことを、もう一度知らなくてはいけないと思うのです。



もし、悪いことをしても、簡単に許されるならば、これを何回も繰り返したほうが、はるかに得なことです。反対に、被害を受けた側にしてみたら、悔しさは癒されず、口だけ、表面だけはとりあえず「許す」という行為が横行し、いかにも簡単で軽い「許し」となっていくのです。

やはり私たち指導員は、クラブの中で、悪いことを「悪い！」ときちんと言える関係、しっかり真実が言えて、それから、時間をかけて向き合い、謝り、最後に許しあう関係こそ、大事にしていかなければ…と思うのです。

謝った側だって、自分のやったことの重大さがわかり、簡単に許されないこともあるのだということ、そして、友達に対しては、そのことで傷ついたにも関わらず、自分を許してくれたのだという感謝の気持ちが生まれます。

こうしてはじめて、真の喜びと、信頼関係を味わうことができるのです。

いつも、きちんと何が悪かったのかが知られ、それを心から謝って、許し許される、そんな気持ちのよいクラブでありたいと、私たちは心より願っています。

これからもぜひ、私たち指導員と共に、子どもを取り巻く大人達が、なんでも話し合っていける、より良き信頼関係を、ごいっしょに作り上げていきたいと思います。どうぞ、今後とも、よろしくお願ひします。



たごうら児童クラブ
指導員 瀧元